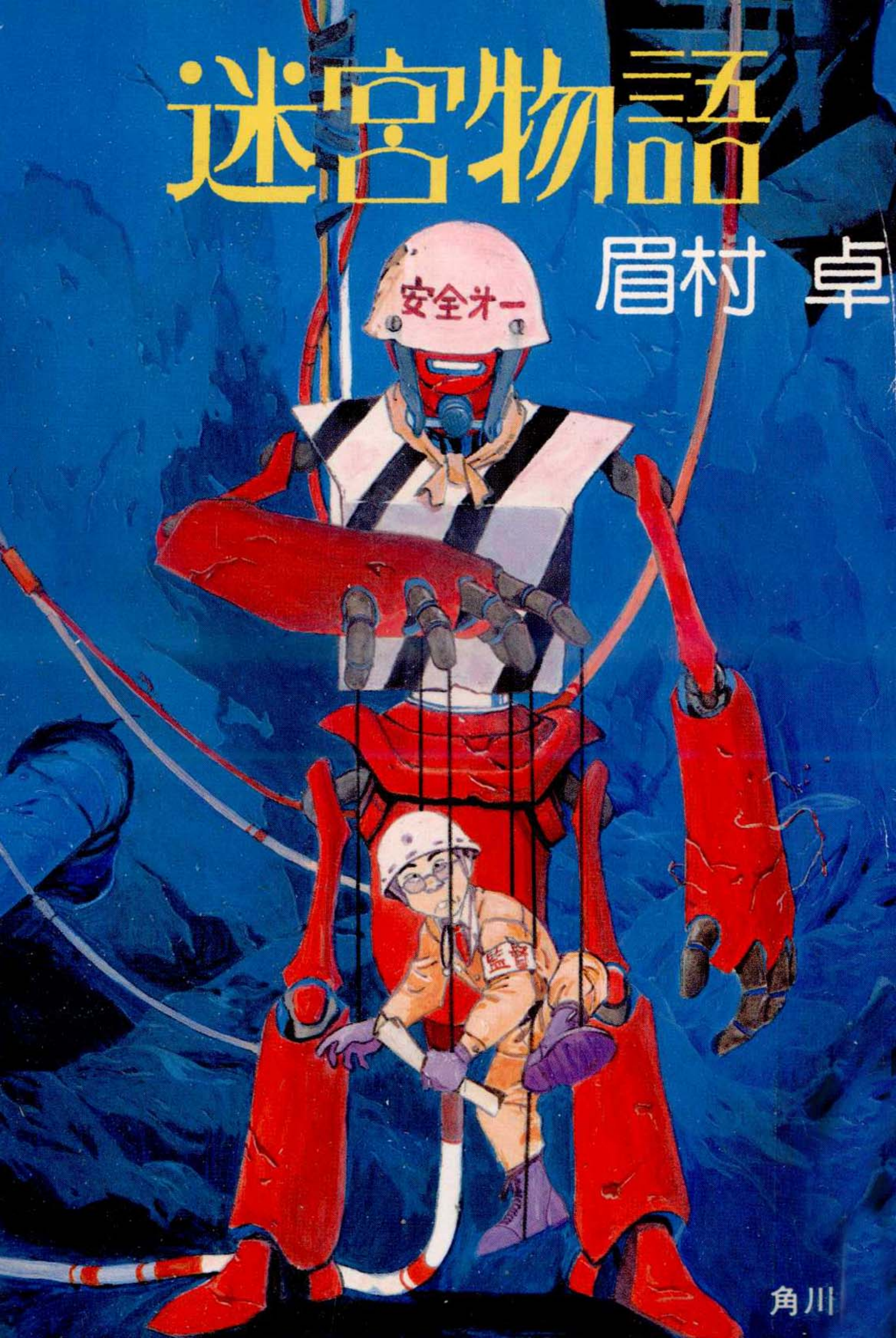


# 迷宮物語

眉村 卓



角川



めい きゆう もの がたり  
迷宮物語

まゆむら たく  
眉村 卓



角川文庫 6484

昭和六十一年八月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

編集部(〇三)二三八—八四五—

電話 営業部(〇三)二三八—八五二—

千—〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

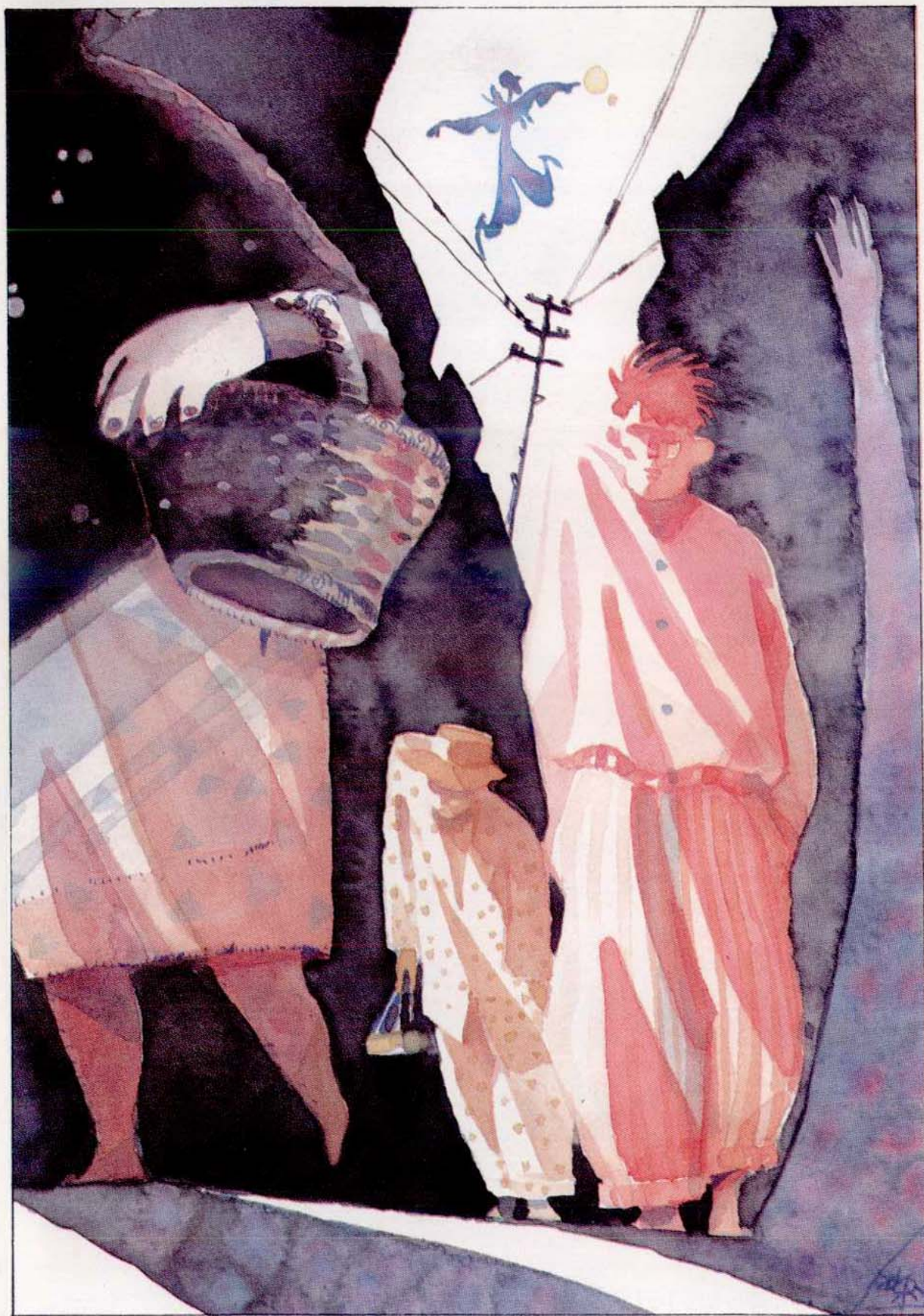
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

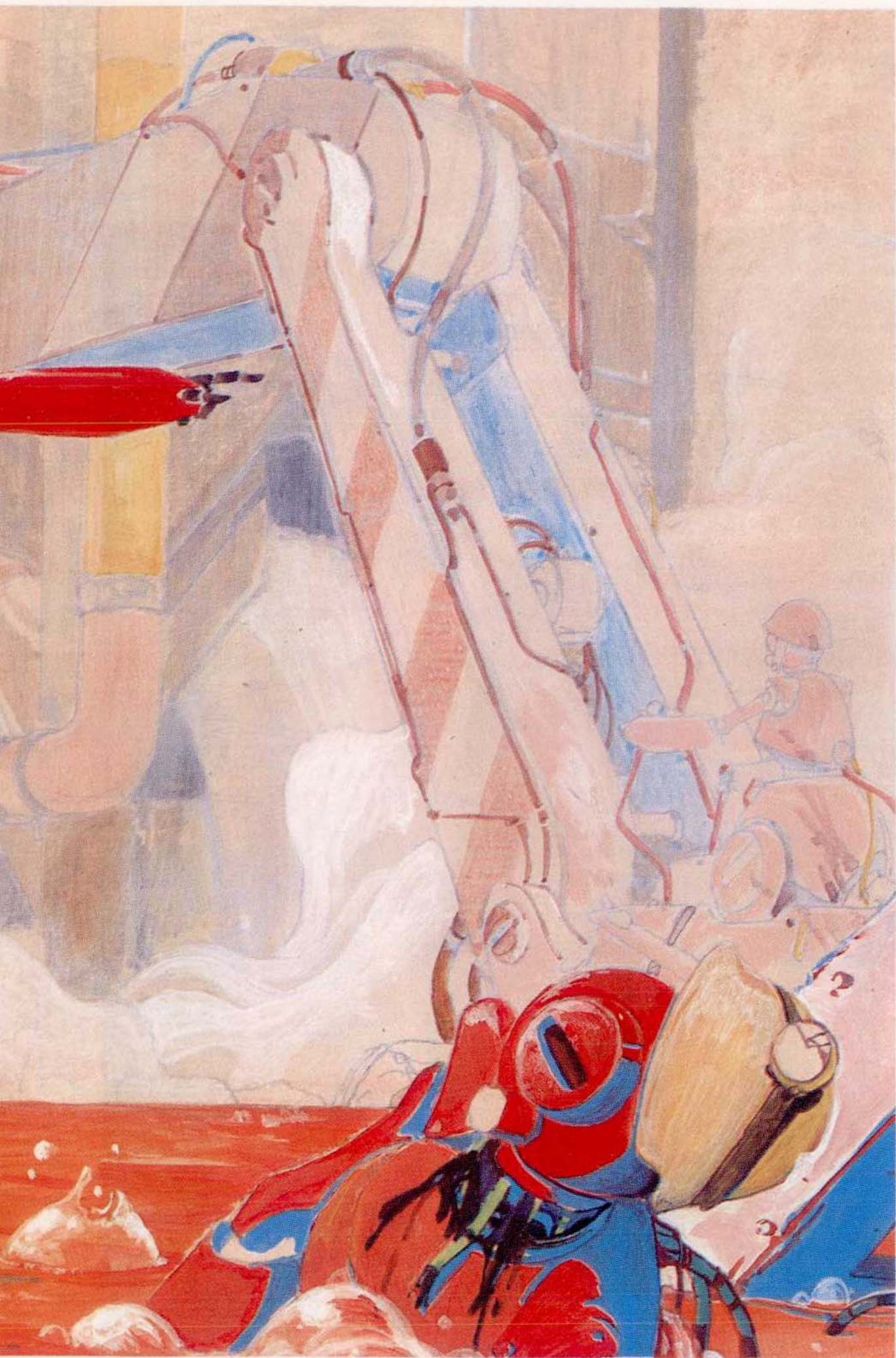
ISBN4-04-135747-0 C0193

1259

# 迷宮物語

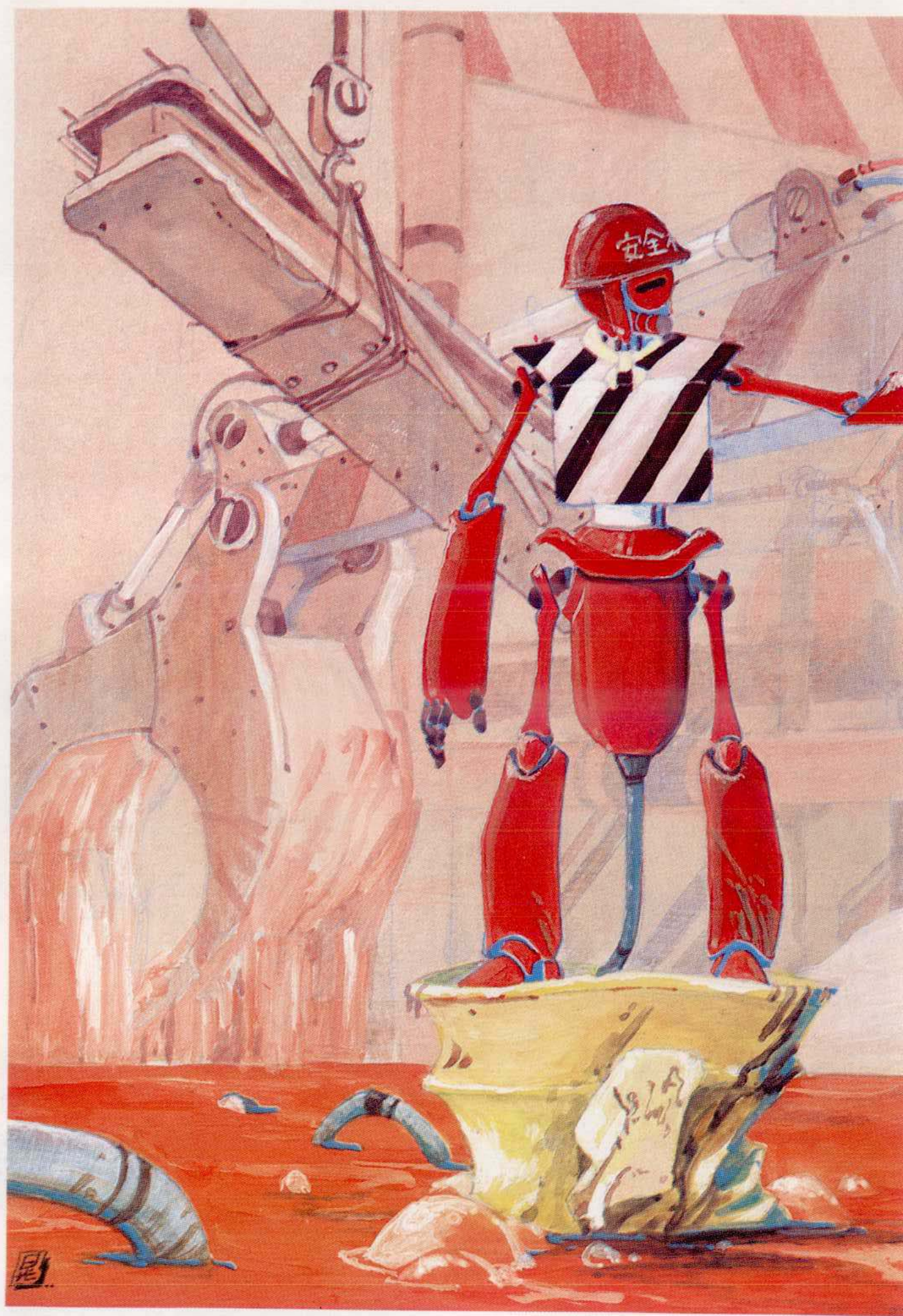






たつ ちょうせいふ か のう しゅうねん ぶか  
いったんセットされたら、目的を達するまで調整不可能の執念深いロボットたちの作業はつづく……。





せつめい ふ か の う      ばん もん と う た  
 ◀ここは説明不可能な世界。伴門淘汰は、ピエロについて行く女の子と猫を追った……。





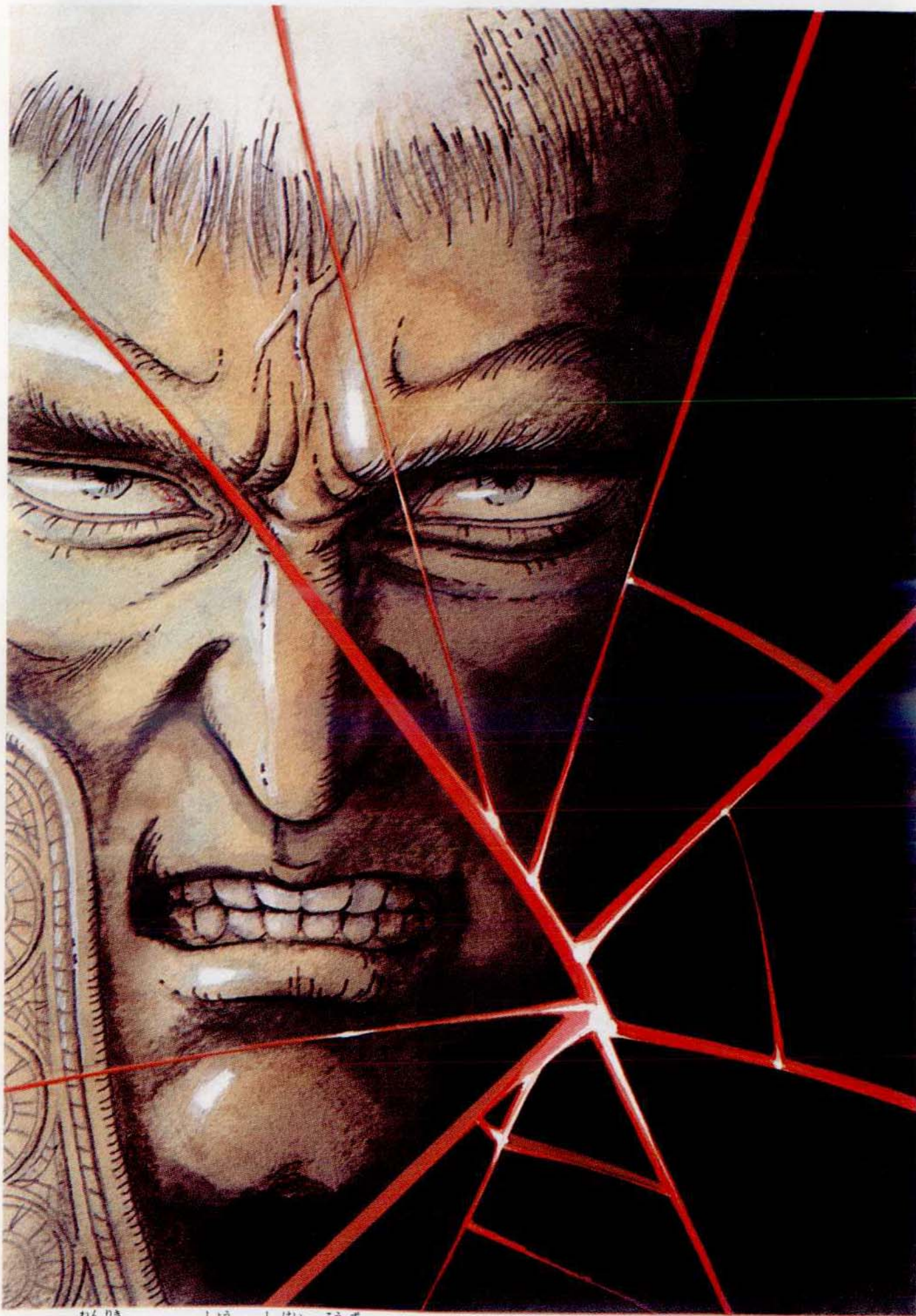








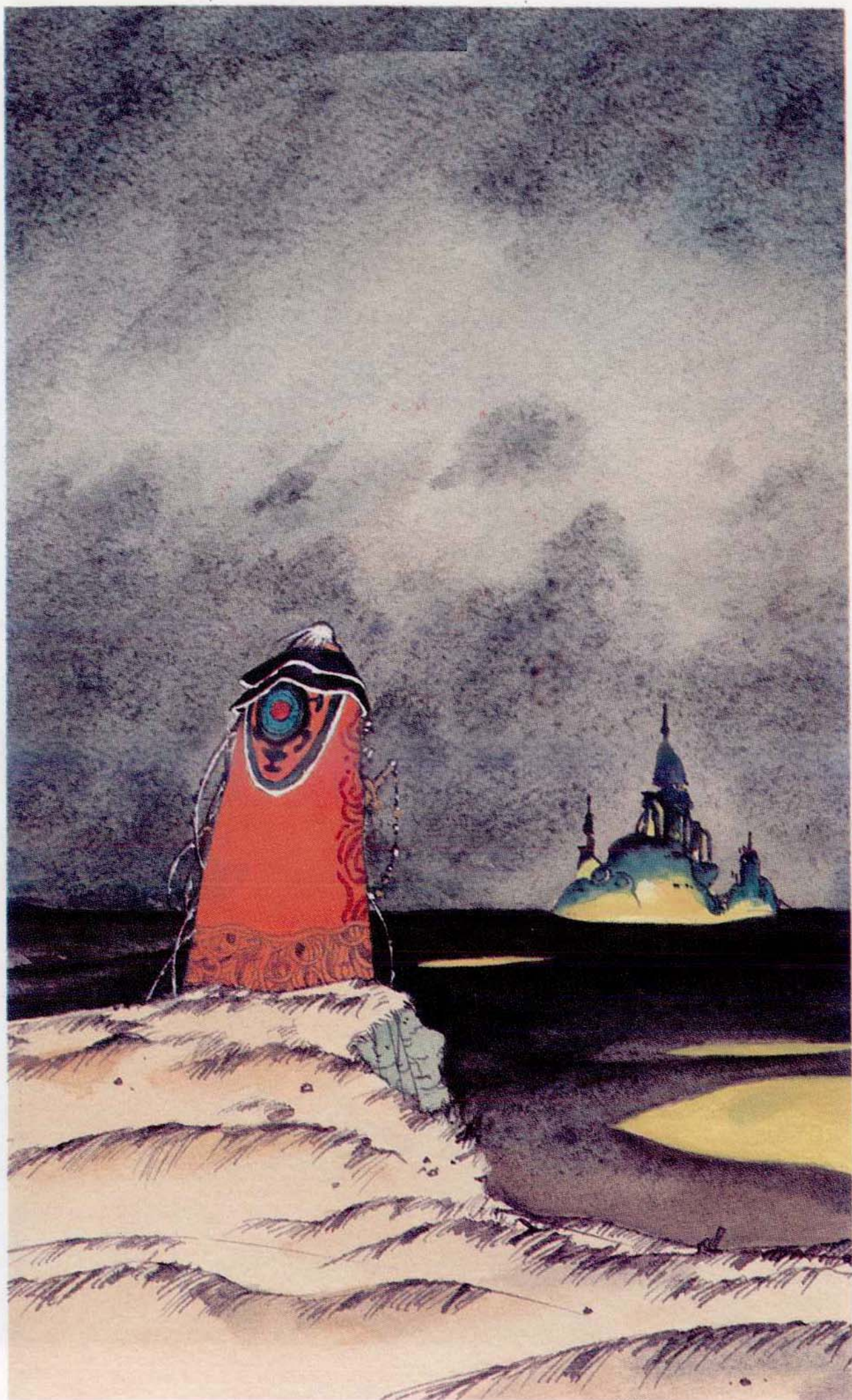




ザックの念力に不安が生じ、支配の構図にヒビが入った。

ロボット1号を背後であやつるものの正体は!?▶





ギゼンダは、<sup>へんきょう</sup>辺境世界の王子として<sup>きかん</sup>帰還。



# 迷宮物語

眉村卓



角川文庫 6484







## 1

きみは階段かいだんをくだっている。先刻迄さつきまではたしかに地面より上だったのに、今は地中への下降かこうなのだ。射し込んだ秋陽が壁かべに貼りはについているけれども、コンクリートのその壁に触ふれたら、きつとつめたいだろう。

降りてきたきみは、小さな踊り場おどの先に伸びる通路を窺うかがう。あかりとて見えぬ闇やみの通路だ。きみはそちらへは行かず、向きを変えて、さらに階段をくだってゆく。射し込む秋陽はしだいに乏とほしくなる一方なのだ。

こんな構造こうぞうの階段があり得うるのか否いなか、ぼくは知らない。しかし、あり得なくても、きみが階段をくだりつつづけていることは事実なのだ。そして、地上にいた記憶きおくも遠くなりつつある。



## 2

なぜ、伴門淘汰か。

伴は伴天連。門は宗門あるいは唐草模様の白塗りの金属門扉。それから自然淘汰説。伴宙太につながるかもわからない。

ともかく、誰かの投影なのだ。

元が不明なので、かりに、伴門淘汰。

伴門淘汰は、案内人のつもりでいる。

実は伴門淘汰自身、とうに迷い込んでしまい、自分がどこにいるのか把握できなないのだ。それでも進めばどこかの場面に出るし、場面どうし似通ったものもすくなくないから、案内の真似事が可能なのであった。自分が迷子であるのをうすうす自覚しながら、深くは考えないようにしている。

「よろしく、お願いします」







小さな女の子がいった。

猫ねこを連れている。

小さな女の子にしては、きっちりした挨拶だ。本当は別のいいかたをしたのが、伴門淘汰ばんもんとうたにそう聞こえたただけかも知れない。が……むこうの意図さえつかめれば、いいのであった。

「いらっしゃい。ではどうぞ、私についてきて下さい」

伴門淘汰は返事をし、先に立って進みはじめる。もちろん投影とうえいだから厚みあつみはなく、ひらひらと揺れながら漂ただよってゆくのだ。とはいえ、擬似夕陽ぎじゆうひと風のおかげで、ふと全面が見えたり、8の字になったり、ときには一本の曲線としてほとんど消失したりで、なかなか変化に富とんでいるのであった。

彼かれと同様の、この世界の住人や電柱たちと擦れ違ちがいつつ、伴門淘汰は進んだ。ときどき、女の子と猫がついてくるか、振り返ふってたしかめながら、である。

しかし、女の子と猫が実際じっさいに自分を感じているのかどうか、例によって伴門淘汰には確信かくしんがなかった。彼自身は疑うたがいもなく相手と言葉のやりとりをしたけれども、女の子と猫にとっては、単に潜在意識せんざいしきの中で行われたに過ぎず、自



己の衝動に従い自分で歩きだした可能性もあるのだ。

擬似夕陽がいつもより赤いな——と、彼は思う。

自分が誰かの投影らしいと気がつきだしたのは、いつ頃からであろう。案内をはじめる前から漠然とそんな感じはしていたが、立体の客と接するようになって、そう信じるに至ったのだ。

だが投影でも仕方がないではないか。どうしようもないではないか。彼は、友人の大半がそうであるように、おのれが投影であることを受容している。

伴門淘汰は、また振り向いた。

女の子と猫は、踊る足どりでついてくる。

さて。

「こちらへ曲って下さい」

彼は、宙でひるがえりながらいった。「こちらに何かがあるはずです。どの系統の場面かは、私にもわかりませんが……多分、私の知っているどれかでしょう。知らない種類なら……私も見聞をひろめることができるというものです」